

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：33925

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520717

研究課題名(和文)日本人のための英語ライティングセンター構築の可能性とその実現計画

研究課題名(英文)An Enquiry into English Writing Centers in Japan for the Project of "Constructing an English Writing Center for Japanese Students"

研究代表者

木村 友保(Kimura, Tomoyasu)

名古屋外国語大学・現代国際学部・教授

研究者番号：30329867

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本の平均的大学の英語ライティングセンター構築の可能性を探り、その実現計画の提案することである。これを目的に、日本の7つ、米国の1つの大学のライティングセンターを訪問・調査した。学生ライティング指導の担当者は2種類いることがわかった。大学院生を「チューター」として訓練し、学生が直面する問題の解決を支援する、ライティング専門の教員を非常勤として採用場合である。

日本のセンターは米国をモデルにしているが、日本人学生のライティング指導の経験が増えれば、「日本人のためのセンター」の必要性が痛感される。どのライティングセンターも学生を「自律した書き手」にすることが最終目標であった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to find out the possibility of constructing an English writing center at an average Japanese university and suggest steps to the construction of such a center. With this purpose in mind, seven Japanese universities and research institutions and one U.S. university were visited and surveyed. This survey shows that there are two kinds of instructors: tutors who are graduate students trained to help students cope with problems they may face in writing and part-time teachers of writing.

Most Japanese writing centers are modeled after those in the United States, but as they have more experiences of helping Japanese students solve their specific problems, they become aware of the necessity of constructing a writing center customized to fit the needs of Japanese students of writing. Any writing center is aimed at helping its visitors become autonomous writers.

研究分野：人文学

キーワード：外国語教育 アカデミック・ライティング 英語教育一般

1. 研究開始当初の背景

報告者が日本の英語教育で今後何が最も大切かと自問した時、すぐに浮かんだのが上智大学名誉教授のピーター・ミルワードのことばだった。その著書、Creative English(研究社、1986)で氏は「日本人の英語学習者よ、大志をいだけ！」と檄を飛ばしている。日本の英語教育現場を鋭い目で見つめてきた氏は、日本人英語学習者に「自分の本当に言いたいことを表現するために良い英語を書くこと」を目指すよう提案する。この提案を実行するため、ライティングセンターの実態を調査し、本務校に「日本人のための英語ライティングセンター」を設立する可能性を探り、具体的な実施計画を提示したいと考えた。

一人でも多くの学生に「自分の本当に言いたいことを表現するために良い英語を書ける」ようになってもらいたい。そのためにはまず学生に英語で書かせる機会を多く持たせなければならない。しかし、多くの現場の教師からは次のような声が聞こえそうである。「1クラスの学生が多すぎる」、「学生にやる気がない」、「試験があるから英語を勉強する」、「学生の英語能力が限られている」、「英語を使う機会が限られている」、「母語でも書いた経験が乏しい」、「ましてや外国語である英語で書いた経験はさらに乏しい」、「英語のライティングは英語のネイティブ・スピーカーしか教えられない」等々。だが、以上の理由はすべて2011年9月2日に行われた大学英語教育学会主催の国際大会で講演したSecond Language Writingの専門家、Paul K. Matsudaによって指摘され、このすべての理由は決して日本独特ではなく、同じような条件下で日本以外の国ではライティング

教育が近年ますます充実してきているとの報告があった。以上が本研究を着想した背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の平均的の大学に英語ライティングセンターを構築できるか、その可能性をまず探り、できるとしたら、具体的にはどんな実現計画が提案できるかを考えることにある。

そのために現在存在する日本のライティングセンターの実施状況をさぐりたい。さらにライティングセンターは元々米国のセンターをモデルにしているので、「本場」の実態も調査したい。

次にライティングセンター訪問調査の中で各センターがどんな設立理念を持っているか、実施する際、どんな問題に直面しているか、その問題をどう解決しているかも調べたい。

最後に、ライティングセンターの種類(日本語のライティングセンターか、英語のライティングセンターか、またアカデミックライティングを意識したものか等)、またセンターで指導に当たっている担当者の種類、センター訪問者の種類も調べたい。

3. 研究の方法

長期休暇を利用して、チームで日本に現存するライティングセンターを訪問調査した。ただし、すべてのライティングセンターに同じ人が行くのではなく、都合のつく範囲で、2人または3人のチームで訪問するという形をとった。この訪問には大学英語教育学会のライティング研究会の全面的協力を得た。

また調査結果を学会の口頭発表、研究紀要、シンポジウムなどでも報告し、より多くの人々とライティングセンターのあり方について協議することを目指した。

4. 研究成果

まず研究代表者の突然の家庭の事情で、当初の計画を少し変更せざるを得なかったことを指摘しておきたい。たとえば、当初の計画では国外のライティングセンターとして、米国以外にもスペインのセンター訪問も含まれていた。「外国語としての英語」のライティングセンターも訪問・調査したかったからだ。また、本研究の理論的基盤として掲げた *The Psychology of Writing Composition* や *Surpassing Ourselves* の著者にはカナダまで行って直接会ってインタビューする予定であった。しかし、この二つの計画は研究代表者に時間的および精神的に余裕がなかったため断念せざるを得なかった。ただし、前者に代わって、ライティングセンターをその一部としている東京大学駒場キャンパスのグローバルコミュニケーションセンターのセンター長の高田康成氏に直接会ってインタビューし、より大きな枠組みからライティングセンターの在り方を考えるチャンスが与えられたことは有意義であった。また後者に関しては著者の一人、Marlene Scardamalia 氏には氏が奈良市で開催された国際大会にキーノートスピーカーとして来日された折、直接会ってインタビューすることができた。「自律した学習者」「知識創造の方法」について再度確認ができたことは大きな成果であった。

本論に入ろう。ライティングセンターの調

査は以下のごとく行われた。

日本国内では7つの大学のライティングセンターを訪問した。大阪女学院大学、東京大学駒場キャンパス、上智大学、津田塾大学、政策研究大学院大学、国際教養大学、早稲田大学である。最初の計画では北海道大学への訪問も考えていたが、担当者が名古屋大学に移ってからは閉館となってしまったため訪問はしなかった。米国ではインディアナポリス大学のライティングセンターを訪問・調査した。

私たちにとって訪問前のライティングセンターに対するイメージは漠然としたものだったが、最初の大阪女学院大学訪問からライティングセンターに対する関係者の熱い思いに接し、その可能性と使命感を感じたことを改めて思い返した。

並行して行ったライティングやチュータリングの理論的研究から大学生のアカデミックな発達を支援するには、ライティング教育は必要条件であり、チューターによる支援も必要条件であることがわかった。ライティング教育とチュータリングを合わせたライティングセンターは、どの大学にも大学生の知的な成長を支援するうえでは必要な組織であることが明確になってきた。一方、大学内にライティングセンターを設置するという大学組織の側面も調査すると日本ではまだ理解が得られておらず、予算的措置も恒常的になされていない実態があることもわかってきた。こうした組織的な環境を整えるのは、学生・教職員という大学を構成している主体の意識の変化が必要であることを実際苦労してライティングセンターを立ち上げ、運営してきたスタッフの生の声から教わる

ことが多かった。

3年間にわたる調査研究で多くの大学にライティングセンターを設置するための研究を行ってきて、この研究が具体的にライティングセンター設置へ結びつくことの必要性を感じた。同時にライティングセンターを組織・運営してきた人々の思い、そこで学んだ学生の知的成長を知ることによって、私たちは改めて「ライティング教育」を考えざるを得なかったという事も大きな収穫の一つだと感じている。そして「自律した書き手」は永遠のテーマであり、人間にとって長期にわたる取り組みが求められることもわかった。

以上が本研究の成果報告だが、本研究の詳細な報告書（『日本人のための英語ライティングセンター構築の可能性とその実現計画』、2015年3月30日発行）も印刷できたことを付け加えておきたい。さらに本研究が今後進むべき方向性は、「英語ライティングセンターの背景に機能する『英語のレトリック』と『考える力』にもっと焦点があてられれば」というものである。報告書を受け取り、丁寧に読んで下さったお一人の読者からいみじくもこの点をご指摘いただいた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計3件)

佐藤雄大、木村友保、ムーディ美穂、鈴木稔子、小島由美、「日本人のための英語ライティングセンター構築への提言」『JACET 中部支部紀要』第12号、2014、48 - 58。
（査読有）

木村友保、「日本の英語ライティングセンターが目指すリテラシー教育」『JACET 中部支部紀要』第12号、2014、59 - 75。（査読有）

木村友保、"Omura Hama and English Lessons" 『名古屋外国語大学現代国際学部紀

要』第10号、2014、35 - 49。

（査読無）

〔学会発表〕(計3件)

佐藤雄大、「日本人のための英語ライティングセンター構築への提言」、『JACET 中部支部大会、2014年6月7日、椋山学園大学

木村友保、「日本の英語ライティングセンターが目指すリテラシー教育」、『JACET 中部支部大会、2014年6月7日、椋山学園大学

佐藤雄大、ムーディ美穂、"The Present Situation of Writing Centers in Japan," The 12th Symposium of Second Language Writing, October 18, 2013, Shandong University, Jinan, China.

〔図書〕(計2件)

木村友保「大村はまと英語の授業」『現代社会と英語 英語の多様性を見つめて』、金星堂、2014、253 - 263。

佐藤雄大「学習者ライティング・プロセスへの介入・支援についてー認知的ライティング・プロセス研究に基づいてー」『現代社会と英語 英語の多様性を見つめて』、金星堂、2014、264 - 274。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 友保 (KIMURA TOMOYASU)
名古屋外国語大学：現代国際学部：教授
研究者番号：30329867

(2) 研究分担者

佐藤 雄大 (SATO TAKEHIRO)
名古屋外国語大学：現代国際学部：准教授
研究者番号：20547038